主催者挨拶２．有馬朗人　独立行政法人科学技術振興機構中国総合研究センター
アドバイザリー委員会　委員長

陳宜瑜先生、松田岩夫大臣、御列席の皆様方、きょうは大変お忙しいところ、このシンポジウムにお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。私も今紹介がありましたように、アドバイザリーコミッティーの委員長といたしまして、お手伝いをしている立場上、主催者側としてごあいさつを申し上げます。有馬朗人でございます。どうぞよろしく。

今月の２日でありました、私の同僚である産業技術総合研究所の吉川弘之さんたちと一緒に、中国科学院と一緒にサステーナブルデベロップメントのための賢人会に出席してまいりました。そして、着くや否や新聞を見ました。これが何かおわかりですか。これは今月の１日の、青海省とチベットを結ぶ青藏鉄道（Quin-Zang　Railway)、チベット鉄道の開通の記事であります。新聞のずーっと端から端まで、列車の地図が書いてありました。大変びっくりしました。ぜひ乗ってみたいものだと思ったんですが、標高 5,000 メートル。そこをずーっと走っている列車でありまして、この技術を開発された中国の技術力に感心をした次第であります。本当に、中国の方々、おめでとうございました。こういうふうな華々しい科学技術における成功を、中国が示すようになってこられたことを心から喜んでいる次第であります。このニュースが出た、すなわち今月の１日、ちょうどそのころ、この中国総合研究センターの活動開始ということになったわけでございまして、我々にとって、大変さい先のよい出発であると考えているわけでございます。

個人的なことを申し上げますけれども、私は 1981 年に初めて中国科学院の御招待で、中国に２度ほど、その年にまいりました。１月に行き、３月に１カ月ほど滞在し、それが中国体験の初めてでございました。そのころから今日まで、毎年、２回ぐらいずつ行っていますから、何十回行ったんでしょうか、50 回ぐらいになるんでしょうか、随分たくさん中国を訪問させていただきましたし、北京大学、上海大学、復旦大学、合肥の中国科学技術大学といった大学とも協力をして、研究を進めてまいりました。特に蘭州にあります原子核の研究所で、いろんな研究をさせていただいているわけでありますが、中国の科学技術が、基礎科学の面でも応用の面でも大変急激に進んできているということに感心しております。そしてまた中国人の学生がいかに勤勉であるか。私は、今、片腕がなくなったような感じなんです。１人、つい去年の今ごろまで、共同研究していた中国人のポスドクの１人が、上海の交通大学の教授として戻ってしまったので、大変残念に思っている。大変な

勉強家で優秀な研究者です。

こういう点から、私は中国が今後ますます発展していくことは間違いないと考えている次第であります。そして、先ほど、今月の初め、北京での会のお話をいたしましたが、それから２週間ほど前、６月の半ばには上海での国際会議に、私も１週間出席しておりました。そのときに、上海の飛行場から上海の町まで８分間、電車に乗りました。これはリニアモーターカーでした。40 キロメートルぐらいの距離でしょうか、それが８分。最高時速 400km/h でありました。大変素晴らしいリニアモーターカーでありまして、日本で、何でこれがやれないんだろうか。松田さんがおられるけれど、ひとつ、羽田と成田ぐらい、このリニアモーターカーで結びつけるというようなことをやったらどうかと私は思った次第であります。

数学の論文数、これを見ますと中国は世界で第４位の地位を占めています。日本は残念なことに、あの、数学で誇りを持っていた日本が第６位になりました。世界で第６位になった。大変残念と言っていいかと思いますが、日本の数学者のために、残念に思っている次第であります。物理・化学、及び、特に材料科学は、日本は依然として頑張っている。総合的に自然科学の論文数は、依然として日本はアメリカに次いで第２位を占めておりますけれども、中国の躍進もまた素晴らしいものであるわけであります。

そしてきのうでありましたか、子供たち、高等学校生の物理オリンピックの成績の発表がありました。５人、中国の代表は全部金賞でありました。日本は５人を一生懸命選んだのですが、１人が銀賞を取り、２人が銅賞を取ったにすぎません。またインドネシアを見ますと、それもまた４人が金賞を取り、１人が銅賞。その名前を見ますと、ほとんどが中国系である。中国は、若者もまた、世界で最高水準の力を、今、発揮しつつあるわけです。日本の若者は大いに頑張らなければだめだと思います。日本は金賞が取れませんでした。随分努力をして、我々は特訓もしたのですけれども、特訓の仕方が足りなかったと思っています。

さて、私は一つ提案があるんです。ノーベル賞学者の数を勘定いたします。1901 年よりノーベル賞の数を勘定していく。自然科学系で勘定をしてまいります。1930 年前後は圧倒的にフランスでありドイツが強かった。その後、イギリスが強くなってまいります。そして、それぞれみんな消えていく。アメリカは 1940 年ごろから急激に伸びていきました。圧倒的にノーベル賞の数はアメリカが強い。しかしながら 1980 年がピークでありました。それからずっと下がりつつある。大体、寿命は 50 年と見ているわけでありますが、ただアメリカの場合、ほかのヨーロッパ諸国と違うところがあります。どこか。ヨーロッパ諸国はドイツならドイツ人、フランスならフランス人がノーベル賞をもらっているケースがほとんどでありますが、アメリカの場合は 1940 年代はナチスドイツによって追放された人々、特にユダヤ系の人々がノーベル賞をずーっと取り続けていたわけです。もっぱらヨーロッパからの移民によってノーベル賞が支えられていた。もちろんミリカンなど、何人か、純粋なアメリカ人もいないわけではありませんが、数が比較的少なかった。それが最近、ア

メリカ育ちの人がどんどんノーベル賞をもらうようになってきたと同時に、ヨーロッパと違うところというのは、新たにアジア諸国からの移民をどんどん受け入れることによって、アジア系のノーベル賞学者、特に中国系のノーベル賞学者が出ている。

ここで私の提案は、もしアジア系の科学研究者が、中国もベトナムも日本もインドも全部引き上げてアジアへ戻って、アジアでひとつ科学立国をしようとしたら、どうなるでしょうか。アメリカは困っちゃうと思うんですけれどね。でも、夢でなく、科学の中心というものがアジアに移ってくる可能性があると私は思っているわけです。こういうふうに、今やアメリカを初め世界の科学技術は、中国や日本を初めとするアジア発の人材によって支えられていると言って間違いはないと思うんです。そこで、ここで日中が手を取りあって、アジアの発展のために一層協力すれば、世界に向かって素晴らしい成果を発信できるだろうと思います。日中の科学技術関係者の交流を深めるためのプラットフォームといたしまして、私も中国総合研究センターのアドバイザリー委員会の委員長として皆様のお役に立てればうれしく思う次第であります。

また、穆栄平先生が所長をなさっておられます中国科学院科学技術政策・管理科学研究所では私を名誉顧問としていただいておりますことを心から感謝を申したいと思います。その立場からも、この日中交流の研究において大いにお手伝いをさせていただきたいと思っているわけであります。

きょうはお忙しい中、このように多くの方々にお越しをいただき、深く感謝をいたします。本日御参加くださいました皆様方にとって、中国の科学技術にかかわる大変ハイレベルな方々のお話を聞く貴重なチャンスになりましたら、素晴らしいことと考えている次第でございます。きょうは中国から大勢の先生方がおいでになったこと、そしてまた皆様方が大勢御参加くださったことに対しまして、心より感謝を申し上げて私のごあいさつといたします。どうもありがとうございました。